咲 オーラスの向こう側

影法師

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

牌に愛された彼女達、宮永照と宮永咲。

…そして、宮永陰。

宮永陰は牌に愛された…そう、愛されすぎてしまった。

自分自身が勝ちたくなくても、牌は勝手に勝つために集まってしまう。

点を低くしたくても、その次の点が高くなってしまう。

…だからこそ彼女は、麻雀を止めていた。

だけど、その想いは一人の少女に出会う事で変わっていく。

…全国で彼女は、どのような戦いを繰り広げるのだろうか？

目次

プロローグ ―― 1
第二局 ―― 4
第二局一本場 ―― 8
第三局 ―― 13
第三局一本場 ―― 18
第四局 ―― 25
第五局 ―― 28
第五局一本場 ―― 32
第五局二本場 ―― 38
第六局 ―― 46
インターバル ―― 51

プロローグ

私は咲の膝の上に、のんびりと頭を預けていた。
私としてはさっさと帰って勉強したいのだが、お姉ちゃんである咲が離さなかったのと、その咲が本が読みたいという事でこうなっていた。
「…川のせせらぎが綺麗ですね」
「でも陰の方が綺麗だよ？」
「……それは月じゃないですか？」
思わず現実逃避をした言葉を拾われて、私は諦めて眼を閉じた。
そのまま本を読みつつ、私の事を丁寧に撫でてくれる咲を少しだけ褒めようとすると…。
「…咲…って、陰さん。どうして此処に居るんですか？」
咲の幼馴染のきゃ…きゅ…京太郎…？が居た。
自分で遊ぶ友達以外は名前を余り覚えられない私にとって、彼の名前を覚えるのは難しいのだ。
麻雀で例えるなら…初心者に点計算教えるくらいには。
「なんで私が呼び捨てで陰がさん付けなの？私、陰のお姉さんなんだけど？」
「双子で自分が姉って名乗らないのって少し珍しくないか？」
「…双子は二人が姉を取り合うのを期待してましたか？」
「……少しだけ」
それは漫画の読みすぎ…なんて言えてしまえば良いのだけど、私は特にいう気もなくそのまま眼を瞑る。
「…って、そうじゃないんだよ咲！今日のレディースランチがとても美味そうでさ！一緒に来てくれねぇか？」
「……陰が…」
「…？私はのんびり此処で川を眺めてるから…」
「…分かった。すぐに帰ってくるからね！」
そう言って走っていく咲を見て、私は思わずほくそ笑む。
最近どころか此処十数年浮いた話も聞かなかったお姉ちゃん達だ。

これくらいは許されるだろう。
…私にも浮いた話、出るのかな。
「…」
しかし暇だ。
咲の為に川を眺めるなんて言った私だけど、実際川なんてとっくに見飽きている。
だからこそさっき通っていた可愛い女の子を薄めで見て…て……
「…あの」
「あ…その、先程膝枕させられていたので、もしかして体調が悪いのかと思いまして…だけど、保健室まで運ぶには時間がなかったから、せめて良くなるまで膝枕をしたらって思いまして…」
「えっと…私は体調悪くないので大丈夫です」
そういうと彼女は少し寂しそうにしてから、私の頭をどかしてくれた。
私は少し伸びをしつつ、彼女の姿を見て…声が出そうになった。
(…この人、さっき私が横目に見てた可愛い女の子じゃないですか！しかも同学年だったんですね…)
「…あの、このまま外ってのも駄目だと思いますし…私と一緒に行きませんか？」
「……いえ、咲…お姉ちゃんがすぐきますの…」
「一緒に、今すぐ行きましょう！」
…なんでこの人、こんなに強引なんだろう…？
そう思いながらも、私は彼女の腕の力に勝てず、ずるずると引きずられていくのでした。
☆☆☆
「…優希。部長はどうしました？」
「んー…？人数も集まらないから寝るって言ってたじぇ。そして私は学食でタコスを買いに行くのだぁ！」
「はい。行ってらっしゃい」
そう言って走っていく元気な女の子を眺めつつ、私はゆっくりと目の前にあるものを触る。

…やっぱり、麻雀牌だ。
私は幾つかの牌を混ぜてから取り、それを適当に並べる。
「…麻雀、やった事あるんですか？」
「うん。あんまり好きじゃないんだけどね…」
「……それは…どうしてですか？」
〔1〕〔1〕〔1〕〔2〕〔3〕〔4〕〔5〕〔6〕〔7〕〔8〕〔9〕〔9〕〔9〕
適当に引いた牌を彼女に見せる。
その牌は、沢山の索子牌が集まっていた。
「…偶然だと思いますよね…？だけど、私にとってはこれが普通なんです」
「……そんなオカルトありえません。偶々、全部偶々…もしくは嘘です」
「…全部本当ですよ」
この能力がなければ、私はきっと…楽しく麻雀をやれていたのだろう。
そう思いながらも、私は自分でバラバラにした牌を丁寧に並べ始めた。

第二局

お茶を飲みながらぼーっとしていると、扉が開いてさっきの元気な女の子が現れた。
タコスを食べていた彼女は、私に興味を示したらしく先程から話しかけてきた。
「陰ちゃんは麻雀やった事あるのじぇ？」
「…少し齧った程度です」
「そっかそっか。折角だし一緒にやらないかじぇ？今なら部長もいるじぇ」
「眠ってますけどね」
じゃあ三麻！なんて言ってくる元気な少女に、取り敢えず東場だけなら言うと、やったといいながら準備をしていた。
「…んっ…？どうしてまこ居ないのに卓出来て…あら、お客さん？」
「そうだじぇ！のどかちゃんが連れてきた、麻雀が出来るお客さんだじょ！」
「そうだったの。えっと、私は…」
「……学生議会長さんですよね？」
「へぇ。記憶力良いのね…私、ここ数か月で一回しか言ってないわよ？」
「えぇ」
私がニッコリと笑いながら頷けば、彼女は嬉しそうに牌を用意していた。
そして場決めなのだが…私は好きな西家になった。
理由？ラス親じゃないから。
「…それじゃ始めましょうか。取り敢えず半荘一回やりましょう？」
☆〔西〕☆〔西〕☆
取り敢えず東場一局、ドラは〔西〕だ。
初手の配牌は…おっと。
〔五〕〔六〕〔九〕〔④〕〔⑤〕〔⑥〕〔⑦〕〔6〕〔7〕〔8〕〔西〕〔西〕〔北〕

…とても普通の…いや、三色も狙える好配牌。
そして最初に来た牌は…〔西〕だった。
〔五〕〔六〕〔九〕〔④〕〔⑤〕〔⑥〕〔⑦〕〔6〕〔7〕〔8〕〔西〕〔西〕
〔北〕〔西〕
普通のセオリーなら、北を捨てるのが良いんだろうけど…正直言って勝つ気はない。
という訳で適当に捨てさせて貰おう。
私は来た牌をそのまま捨てて、次の番が来るまで待つ。

元気少女
〔發〕
〔横西〕〔横東〕学生議会長
〔西〕
私
〔五〕〔六〕〔九〕〔④〕〔⑤〕〔⑥〕〔⑦〕〔6〕〔7〕〔8〕〔西〕〔西〕
〔北〕
次に来た牌は〔5〕。
やった三色見えてきたなんてとてもじゃないけど言えない。
…取り敢えず、西を続けて捨てておこう。
〔五〕〔六〕〔九〕〔④〕〔⑤〕〔⑥〕〔⑦〕〔5〕〔6〕〔7〕〔8〕〔西〕
〔北〕
次、〔七〕。
三色はしたくないからそのまま自模切り。
その次はアプローチを変えてきたのか〔⑤〕。
一盃口狙いに変更したのかはわからないけど…私はそのまま〔西〕を切る。
〔五〕〔六〕〔九〕〔④〕〔⑤〕〔⑥〕〔⑦〕〔5〕〔6〕〔7〕〔8〕
〔北〕
元気少女以外の二人が凄い目で見てきたけど取り敢えず無視をする。
これくらいはまだあり得るから許してほしい。
次は…〔⑥〕、此処までは許す。

〔五〕〔六〕〔④〕〔⑤〕〔⑤〕〔⑥〕〔⑥〕〔⑦〕〔5〕〔6〕〔7〕〔8〕
〔北〕
次に〔⑦〕が来たため、此処で私は自模切りをして要らないアピールをしておく。
…目の前の元気少女、結構速くて重そうだね。
次に来たのは〔七〕…って、またか。
これ以上連打は目の前の元気少女に鳴かれるので持っておいて、しょうがないから〔⑦〕を捨てておく。
〔五〕〔六〕〔七〕〔④〕〔⑤〕〔⑤〕〔⑥〕〔⑥〕〔5〕〔6〕〔7〕〔8〕
〔北〕
「うぅ…欲しい牌が来ないじょ…」
「しょうがないわよ。そんな日もあるわ…ってあら、これは危ないわね…」
そう言って、少し悩みつつ出したのは〔⑤〕。
私は点を極限まで減らす為に考え…
「ポン」
〔五〕〔六〕〔七〕〔⑥〕〔⑥〕〔5〕〔6〕〔7〕〔8〕〔北〕〔⑤〕〔⑤〕
〔横⑤〕
取り敢えず鳴いておき、次いでに〔④〕も切っておく。
次に来た〔⑦〕は手元に置いておく。
〔五〕〔六〕〔七〕〔⑥〕〔⑥〕〔⑦〕〔5〕〔6〕〔7〕〔北〕〔⑤〕〔⑤〕
〔横⑤〕
学生議会長は私を見て…少し冷や汗をかいた様に〔⑥〕を捨てる。
私はニッコリと笑ってポンと良って奪い取った。
〔⑦〕を捨てて、私は準備に取り掛かる。
〔五〕〔六〕〔七〕〔5〕〔6〕〔7〕〔北〕〔⑥〕〔⑥〕〔横⑥〕〔⑤〕〔⑤〕
〔横⑤〕
次に手に入れた牌は〔⑤〕。
私は微笑みつつ…
「槓」

加槓をする。
そして手に入れた牌は…北だ。
しっかり考えていた通りの展開になった事に微笑み、私は手牌を見せる。
「自模…嶺上開花のみ。４０符１翻で４００・７００点」
〔五〕〔六〕〔七〕〔５〕〔６〕〔７〕〔北〕〔北〕〔⑥〕〔⑥〕〔横⑥〕
〔⑤〕〔⑤〕〔横⑤〕[横⑤]
私の手牌を見て手加減されたと理解できたのか、私を連れてきた少女が立ち上がる。
そんな彼女を見て、私は溜め息を吐いた。

第二局一本場

「…これは何ですか」
「和…」
「貴女の手、本来なら役牌三色一盃口も狙える配牌でした」
「…一盃口なんて、後付けですよ」
「つまり役牌三色は最初から出来ていた…そういう事ですよね？」
さて、どうしようか。
私は別にこれから此処に来るわけじゃないので、別に彼女達と仲悪くなるのは…ああいや、学生議会長とギクシャクするのは大変そうだけど…良いのだけど。
それでも初めて出会った縁は大事にしておきたい為、私はすでに対処法を考えていた。
「三色…ですか」
「そうです！どうして捨てたんです…」
「…すみません。最近やってなくて忘れてましてね。なんでしたっけ三色って」
「…え？」
私が考えた作戦、すっ呆ければ良いじゃない大作戦。
「お姉ちゃんが嶺上開花を良くする人でして、私にとって麻雀は槓して嶺上開花する位しか覚えてないんですよ」
「…じゃあさっきのあれは？私に見せてくれたあの役満は⁉」
「…えっ？役満？」
そういえば確かにあんな役満があった気がする。
…咲がくれた役満リスト、国士無双と四槓子しか書いてないから覚えてなかった。
「…嘘は言ってないわね…まぁ、忘れてるならしょうがないわよね」
「そうだじぇ！」
「そうですだじぇ」
元気少女の真似をしつつも、私は勝ったと確信する。
「じゃあ、どうして点計算出来たのかしら？まさか役忘れて符計算覚

えてる訳ないでしょうし？」
「あ…えっと…それはですね…」
「幾ら何でも、符計算は記憶と一緒だなんて言えないわよね？しかも、あんな点を捨てる様な真似をしてるなら猶更よ」
さて、どうしようか。
お姉ちゃんも±０で遊んでたと言えばそれで良いのだが、流石にお姉ちゃんの株を知らない間に下げる事はしたくない。
だからこそ…私はあいまいに微笑んだ。
「じゃあ東二局行きましょうか。今度はお遊び一切なしで…ね？」
その言葉と共にドラが表示された。
ドラは…〔①〕だ。
〔一〕〔一〕〔一〕〔①〕〔①〕〔①〕〔1〕〔1〕〔1〕〔9〕〔9〕〔9〕〔九〕
さてどうしようかと悩む。
このまま何も考えず四槓子しても良いのだが…流石にあれだろう。
そう考えながら…私は新しく第一打を打とうとしていると…
「…って、陰!?」
お姉ちゃんである咲が私の所に現れた。
「良い所に！私の代わりに打っておいて！」
「えっ!?」
「な、何言ってるんです!?」
「…お、お手洗い行きたいの…駄目？」
「……分かったわよ。取り敢えず行ってらっしゃい」
そう言って私は急いで外に出つつ…次いでに荷物を取ろうとして…
「陰？私、ちょっとお姉ちゃんとしてお話したいなぁ…って」
そういわれて苦笑しながら放置し、私は全力で家に帰ろうと思った。
どうせ荷物って言っても鞄はアピールの為に持ってるからどうでも良い。
後咲が持って帰ってきてくれる筈だ。

多分…きっと…
☆〔一〕☆〔①〕☆〔1〕☆〔9〕☆
取り敢えず時間を潰す為に教室でだらけていると、私の教室には知らない女性が居た。
…本当に誰だろう。
「えっと…宮永陰さん？」
「はい？」
「ちょっとお話聞きたいんですけど…良いですかね？」
「…まぁ良いですけど…？」
私がそういうと、目の前の女性は早く早くと机の裏に隠れていた男の人を呼んでいた。
「…貴女が宮永照さんに紹介された宮永陰さんで良いんですね？」
「えっ？」
あの人何したんだ。
私はそう思いつつも、取り敢えず笑みを浮かべる。
「実は私達、Ｗｅｅｋｌｙ麻雀ＴＯＤＡＹって所の…知ってる？」
「えっと……すみません」
「ああいえ、大丈夫です！宮永照さんも同じような反応をしてましたし！」
「そ…そうなんですね」
知ってたよ。
だってあの人毎日麻雀してたもん、私が飽きてもお姉ちゃんが泣くまで絶対終わらなかったもんね。
「…それでは、早速。子供の頃天和で何度も上がっていたと聞きましたが、流石に冗談ですよね？」
「当たり前ですよ」
「そ、そうですよね…流石に天和で上がり続けるなんて、出来る訳が…」
「天和は一ゲームに一回しか出来ないんですから〝何度も〟上がったなんて言えませんよ」
「え？」

「？」
思わず漏れていた驚きの声に、私が逆に驚いて首を傾げた。
はて、私は不思議な事を言ったのだろうか？
「つ、次の質問です。確か宮永家は三姉妹と聞きましたが、一番強かったのは誰ですか？」
「…一番強いですか。そうですね…」
私は取り敢えず強いという定義を考える。
私達の卓で強いと言えるのは…自分で決めた意思を貫き通す実力だろう。
…連続和了をする照。
…±０と嶺上開花で遊ぶ咲。
…なるべく長く遊びたい私。
数合わせのお父さんと監督役のお母さん。
「…照お姉ちゃんですかね。一番強いのは」
「…成程、やはり姉の威厳は守っていたんですね」
「えぇ。良くラスになって泣いていました」
「そうなんですか…皆子供らしい一面があるんですね」
「そうですね」
嬉しそうに話してくる彼女を見つつ、私も同じように微笑んだ。
泣いてたのはお姉ちゃんだし姉の威厳はホコリも無いけど別に良い。
だってきっと、この雑誌を読んだ照が難しい顔をしてくれるのだろうから。
「…最後に、お姉さんに向けて一言あります？妹を代表して…ってことで」
「……そうですね。
じゃあまずはお菓子を食べすぎない事ですかね？…最近お母さんが私に愚痴を入れてきましたから。
次に道に迷わない事、教室に行くまでに慣れたとか言いながら帰って来たのが深夜だったと聞きました。気を付けてください。
最後に…今度東京に行く時がありましたら、私と一緒に〝案内役〟

を付けて出掛けましょう。咲は騙せていましたがアイスを買いに行く時に道に迷って花畑行きましたよね？嶺上開花の話なんてしてないで家に帰るまでの道探してください」

以上ですと言って私は息を吐くと、彼女が私に対して本当にこれを書くのか聞いてきた。

…確かに言い過ぎたかもしれないけど、表に出す様なものはこれくらいで良いだろう

どうせ、手紙は月に一回出しているのだから。

「…じゃ、じゃあお疲れ様でした。私達はこれで…」

「えぇ。私も帰り…」

そう言いながら私は後ろ側の扉から出ようとすると…其処には…

「へぇ…帰るんだ。私、待っててっていったのに帰っちゃうんだ？へぇ…しかもお姉ちゃんにメッセージして私には何もないんだ」

魔王が居た。

第三局

「…という訳で連れてきました。えっと妹がごめんなさい」
そう言いながら私を抱きしめてあの部室に連れてきた咲を見て、私は諦めた様にぐったりとする。
…抱きしめる力が何時もより強くてどうしようもないしね。
「…わ、私はほら…この後用事もあるし帰ろうかなって…」
「へぇ？私聞いてないんだけど？どうして？」
「ごめんなさい嘘です」
適当に嘘を吐いてみるが、それを物ともしない咲。
私は溜め息を吐きつつ、じっと学生議会長の方へ助けを求めた。
…って、あれ？
「部長なら眠ってますよ。という訳で…麻雀をしましょうか？」
「あ、陰。彼女は和ちゃんって言うの。しっかり覚えてね？」
「…えっと…ほら、其処の…きょ？」
「京ちゃんは帰っても良いよ？寧ろ四人の状況を作りたいから帰ってほしいなって」
「お…おう」
そう言って外に押し出されていく彼を見て、私は今度こそ冷や汗が出た。
これ、どうすれば良いのだろうか？
「…じゃあ早速、麻雀しよ？」
「咲は麻雀が嫌いだった筈だよね？麻雀したくないんじゃ…」
「え？私は泣き言言うお姉ちゃんが嫌だっただけだよ？」
「…あ、さいですか…」
☆〔白〕☆〔■〕☆
元気少女が東で和って人が南、後咲が西。
ドラは〔北〕。
私はラス親である北家だから自風がドラではある。
〔西〕〔東〕〔三〕〔五〕〔七〕〔七〕〔①〕〔⑦〕〔⑧〕〔6〕〔6〕〔7〕〔7〕

適当に並べた配牌がこんな感じだった訳で、私からすればどうすれば…というより、この状況で初手の捨て牌をどう選ぶかが疑問だ。
〔①〕は安全に見えて、多分だけど咲の槓材だろうから最後まで持っておきたい。
〔西〕、〔東〕はどっちかを捨てて様子を見たいかな。
後は…北が来ない所を見ると誰かにもたれているのが一番可能性が高いかな。
〔西〕〔東〕〔三〕〔五〕〔七〕〔七〕〔①〕〔⑦〕〔⑧〕〔6〕〔6〕〔7〕〔7〕〔四〕
〔東〕は重ならないのと、後誰かが次に引きそうという気がするからさっさと捨てる。
西は別に良い。
何なら咲は±0目指してるだろうから自風が乗るこの場所では使わないでしょ。
〔西〕〔三〕〔四〕〔五〕〔七〕〔七〕〔①〕〔⑦〕〔⑧〕〔6〕〔6〕〔7〕〔7〕

和

〔白〕
咲〔白〕〔3〕元気少女
〔東〕
元気少女は〔3〕を捨てている事と、先程戦った感じからして…速くて重い一撃だろう。
二人の〔白〕捨ては…正直分からない。
〔西〕〔三〕〔四〕〔五〕〔七〕〔七〕〔①〕〔⑦〕〔⑧〕〔6〕〔6〕〔7〕〔7〕〔8〕
迷わず〔西〕捨て。
此処までは迷う訳ないけど…そうだなぁ…次に来るのがあれだった終わりかな。
〔東〕〔西〕
〔三〕〔四〕〔五〕〔七〕〔七〕〔①〕〔⑦〕〔⑧〕〔6〕〔6〕〔7〕〔7〕〔8〕

後数手は正直何も考えなくて良い様な面子そうだし私はさっさと次の牌を待ち続ける。

元気少女は後数手で出来るだろうけど…混一色かな。

〔三〕〔四〕〔五〕〔七〕〔七〕〔①〕〔⑦〕〔⑧〕〔6〕〔6〕〔7〕〔7〕〔8〕〔⑥〕

〔三〕〔四〕〔五〕〔七〕〔七〕〔①〕〔⑥〕〔⑦〕〔⑧〕〔6〕〔7〕〔7〕〔8〕〔六〕

〔三〕〔四〕〔五〕〔六〕〔七〕〔七〕〔①〕〔⑥〕〔⑦〕〔⑧〕〔6〕〔7〕〔8〕〔八〕

この辺りまでだろうか？

取り敢えず私は綺麗に三色を作れた事を嬉しく思いつつ、それでも警戒はしておく。

〔東〕〔西〕〔6〕〔7〕〔七〕〔三〕〔四〕〔五〕〔六〕〔七〕〔八〕〔①〕〔⑥〕〔⑦〕〔⑧〕〔6〕〔7〕〔8〕

一盃口が作れなかったのは…ああ、誰かが〔8〕を抱えて…いや…

私は一応、咲の顔を見つながらも彼女の癖を見抜いて手牌を考える。

〔白〕〔西〕〔③〕〔③〕〔5〕〔6〕〔7〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔①〕〔①〕〔①〕〔■〕〔■〕

考え方的にはこんな感じだろうか？

頭を字牌にして平和と断么九を放棄して嶺上開花のみだろうか？

後は後々の符計算を考えて頭を何も関係ない風牌にしている事、後は私に北が来ない事を考えて…こんな感じだろう。

〔6〕〔7〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔①〕〔①〕〔①〕〔北〕〔北〕

後は〔①〕を大明槓しようとしている事から、残りの手牌は符を少なくしたいが為に順子をするだろう。

…という訳で、残りは適当な順子だ。

だからこそ和ちゃんには頑張ってそこら辺を絞ってほしい所だけ

ど…
「チー」
〔白〕〔西〕〔③〕〔③〕〔5〕〔北〕
〔6〕〔7〕〔■〕〔■〕〔■〕〔①〕〔①〕〔①〕〔北〕〔北〕〔横1〕〔2〕
〔3〕
駄目だ気付いてないっぽい。
そして切った牌を見て、私は彼女が聴牌（嶺上開花）した事に気付く。
…どうするべきか。
〔三〕〔四〕〔五〕〔六〕〔七〕〔八〕〔①〕〔⑥〕〔⑦〕〔⑧〕〔6〕〔7〕
〔8〕〔②〕
こちらは空聴だから上がれるのは無い。
兎に角此処は適当に自模切りをしつつ時間を稼いで、私は時間を…
「槓」
〔6〕〔7〕〔②〕〔②〕〔②〕〔①〕〔①〕〔①〕〔北〕〔北〕〔横1〕〔2〕
〔3〕
謀られた。
私は点を減らす為に彼女はギリギリまで符を削っているって思った。
…だけどそれは違くて…
〔6〕〔7〕〔①〕〔①〕〔①〕〔北〕〔北〔横8〕〕〔横1〕〔2〕〔3〕〔②〕〔②〕
〔②〕〔横②〕
「自模。嶺上ドラ〝4〟…8000の責任払いよろしくね？陰」
「…分かった」
ドラは乗っていた。
という事は…咲は本気を出しているらしい。
ああ…北を考慮してた時点で考えるべきだったかな。
…靴下、履いてなかった事。
元気少女　25000
和　25000
咲　33000

陰　１７０００

「第二局、行きましょう」

その言葉と共に、私は意識をゆっくりと覚醒させた。

第三局一本場

二本場でドラは〔④〕
親は和って人だけど…正直脅威とは思えない。
…だって彼女の打ち方はデジタル擬きでしかないのだから。
だからこそ…特急券等を鳴かせなかったら良いだけだ。
〔四〕〔③〕〔⑤〕〔5〕〔5〕〔7〕〔中〕〔中〕〔中〕〔發〕〔發〕〔發〕
〔白〕
さて…どうするべきだろうか？
…普通に行く大三元狙い……？

和

〔東〕

咲〔④〕　元気少女

駄目みたい。
これどう頑張っても私が振り込む奴でしょう。
咲がいきなりセオリー無視してるし。
〔四〕〔③〕〔⑤〕〔5〕〔5〕〔7〕〔中〕〔中〕〔中〕〔發〕〔發〕〔發〕
〔白〕〔④〕
さて、どうやって乗り切ろうか。
実際余った〔四〕は捨てておきたい気がするが、それだと元気少女に拾われる危険性がある。
かと言って〔7〕はつながりそうだからパスしたい。
…いや、此処は繋がる関係無しにこれかな。
〔中〕
〔四〕〔③〕〔④〕〔⑤〕〔5〕〔7〕〔中〕〔中〕〔發〕〔發〕〔發〕
〔白〕
〔中〕を捨てて一瞬どうだと思うが、皆は特に反応してこなかった。
…良かった国士無双聴牌とかじゃなくて。
〔四〕〔③〕〔④〕〔⑤〕〔5〕〔7〕〔中〕〔中〕〔發〕〔發〕〔發〕
〔白〕〔7〕
〔四〕〔③〕〔④〕〔⑤〕〔5〕〔5〕〔7〕〔7〕〔中〕〔中〕〔發〕〔發〕

〔白〕
繋がるって言ったけど、重なるとは思わなかった。
取り敢えずこの状態なら如何にかして上がりを作れそうだね。
〔四〕〔③〕〔④〕〔⑤〕〔5〕〔5〕〔7〕〔7〕〔中〕〔中〕〔發〕〔發〕
〔白〕〔⑤〕
〔四〕〔④〕〔⑤〕〔⑤〕〔5〕〔5〕〔7〕〔7〕〔中〕〔中〕〔發〕〔發〕
〔白〕〔四〕
〔四〕〔四〕〔⑤〕〔⑤〕〔5〕〔5〕〔7〕〔7〕〔中〕〔中〕〔發〕〔發〕
〔④〕
七対子聴牌。
安いけど手の入り方的にこれ以外にそれたら痛手を食らう可能性が高いからしょうがない。
〔中〕〔發〕〔③〕〔白〕
〔四〕〔四〕〔⑤〕〔⑤〕〔5〕〔5〕〔7〕〔7〕〔中〕〔中〕〔發〕〔發〕
〔④〕〔⑦〕
五巡目立直は中々怖いけど…そうだね。
大丈夫そうかな？
…目の前の和は降りる気がするし、元気少女は…ああうん。
〔④〕〔⑤〕〔9〕〔4〕
出すでしょこれ。
「立直」
〔中〕〔發〕〔白〕〔③〕〔横⑦〕
〔四〕〔四〕〔⑤〕〔⑤〕〔5〕〔5〕〔7〕〔7〕〔中〕〔中〕〔發〕〔發〕
〔④〕
どうせ〔①〕―〔④〕の待ちの可能性もある以上、ひっかけられる期待はしていない。
それに立直してドラを切る事を目の前の和はしない筈、というか降りろ。
咲はどうせ槓狙いで適当な牌持ってるから大丈夫。
「じょ?!さっきから二人共手が早いじぇ!?」
「そんなにはやいですか？」

「当たり前だじぇ！」
「あはは…」
「…偶然です。偶然に決まっています」
「…こんなの、当たった方が事故だじぇ！」
そう言いながらも〔④〕を強打する。
確かに当たったら事故だ、でもどうせ安いから勘弁してほしい。
「ビンゴ。それですよ元気少女ちゃん、立直一発七対子…咲裏ドラは？」
「乗ってるよ？」
「じゃあドラ４。１６０００ですかね？」
「…元気少女ってなんだじょ…」
裏が普通に乗って高かった。
ごめんね元気少女ちゃん。
元気少女　０９０００
和　２５０００
咲　３３０００
陰　３３０００
さて東場第三局。
私としては此処をさっさと駆け上がって元気少女を飛ばして終わりたいんだけど…
「…っ」
流石にそうはさせてくれないらしい。
咲の眼がさっきからずっとこっちを見ている…というかさっきの手だってそうだ。
白暗刻とか私が捨てる巡目が少し遅かったら嶺上開花されてた。
…そろそろ、あれをやるべきかな？
ドラは…うん、今回は関係なさそうな〔③〕。
〔一〕〔一〕〔九〕〔①〕〔⑨〕〔1〕〔1〕〔5〕〔6　〕〔9〕〔東〕〔西〕〔北〕
国士無双でも狙えそうな配牌…いや、今回狙っても良い事なさそうだけど。

…というか、このまま国士上がると咲の±０がなぁ…少し手伝ってあげるかな？

〔一〕〔一〕〔九〕〔①〕〔⑨〕〔1〕〔1〕〔5〕〔7〕〔9〕〔東〕〔西〕〔北〕〔北〕

最初の自模は北。

迷わず〔西〕を捨てつつ、今回だけは周りを気にせずにのびのびと打つ。

私にはラス親あるからいいや…みたいに思ってると思われてたら最高だ。

〔一〕〔一〕〔九〕〔①〕〔⑨〕〔1〕〔1〕〔5〕〔7〕〔9〕〔東〕〔北〕〔北〕〔一〕

〔一〕〔一〕〔一〕〔九〕〔①〕〔1〕〔1〕〔5〕〔7〕〔9〕〔東〕〔北〕〔北〕〔一〕

「槓」

「ちょ。陰!?」

〔九〕〔①〕〔1〕〔1〕〔5〕〔7〕〔9〕〔東〕〔北〕〔北〕〔1〕〔■〕

〔一〕〔一〕〔■〕

〔九〕〔1〕〔1〕〔1〕〔5〕〔7〕〔9〕〔東〕〔北〕〔北〕〔■〕〔一〕〔一〕〔■〕

咲が何かを言おうとしたけど、私は態と無視をする。

だってこの手、結構難しいし。

〔九〕〔1〕〔1〕〔1〕〔5〕〔7〕〔9〕〔東〕〔北〕〔北〕〔9〕〔■〕

〔一〕〔一〕〔■〕

〔九〕〔1〕〔1〕〔1〕〔5〕〔7〕〔9〕〔9〕〔北〕〔北〕〔■〕〔一〕

〔一〕〔■〕

〔九〕〔1〕〔1〕〔1〕〔5〕〔7〕〔9〕〔9〕〔北〕〔北〕〔9〕〔■〕

〔一〕〔一〕〔■〕

〔1〕〔1〕〔1〕〔5〕〔7〕〔9〕〔9〕〔9〕〔北〕〔北〕〔■〕〔一〕

〔一〕〔■〕

手が漸く揃ったのを見て、私は漸く安堵の溜め息を吐いた。

…大丈夫、他の皆からきっと出てくるだろうし…うん。

〔西〕〔⑨〕〔①〕〔東〕〔九〕
〔1〕〔1〕〔1〕〔5〕〔7〕〔9〕〔9〕〔9〕〔北〕〔北〕〔■〕〔一〕
〔一〕〔■〕
これ相手からしたら流し満貫狙っているようにしか見えないね。
…ああいや、幸先が良かった清老頭にも見えるかな？
「…き、切れないじぇ…流石に切れないじぇ…」
「此処で進まないとトップ目が…だけどもし…」
「…私の上がり牌が…」
咲が何か言ってるけど私は知りません。
相手に持たれて崩れる様な待ち方をしている方が悪いのだ。
…照とか、当たり牌止めて四暗刻したら泣かれたなぁ…
「…うーん…流石にまだ…平気…だよね？」
咲が〔9〕を捨ててくる。
…何をもって大丈夫だと思ったのだろうか…？
「それ槓です」
「うぇえ!?」
〔1〕〔1〕〔1〕〔5〕〔7〕〔北〕〔北〕〔1〕〔横9〕〔9〕〔9〕〔9〕
〔■〕〔一〕〔一〕〔■〕
「お、もう一個槓です♪」
「それ私の奴！」
〔5〕〔7〕〔北〕〔北〕〔6〕〔■〕〔一〕〔一〕〔■〕〔横9〕〔9〕〔9〕
〔9〕〔■〕〔1〕〔1〕〔■〕
「うぇ!?」
「あ、学生議会長おはようございます」
「あ、うん。おはよう」
私の後ろで声を上げた学生議会長の口を塞ぐ為に挨拶をする。
そして私は…〔6〕を切った。
「ちょ!?」
「……陰…」
「二人共何かありました？」
「何でもない」

しょうがない。
此処で嶺上開花したら計算が狂って咲が±０にならなくなってしまうのだ。
…だからこそ、私は見送りした。
何故なら…
〔５〕〔７〕〔北〔横〕〕〔北〔６〕〕〔■〕〔一〕〔一〕〔■〕〔横９〕〔９〕〔９〕〔■〕〔１〕〔１〕〔■〕
どうせ引いてこれるのだ。
この感覚に慣れたくは無かったが…今はもう、慣れてしまった。
「自模。三槓子のみで…」
計算合ってるかな？
２０の２…３２が二つで……ってあ、頭０だ！
「いやギリギリ足りてた！１１０符の２翻で３６００と１８００（インパチ）！」
元気少女　０７２００
和　２３２００
咲　２９４００
陰　４０１００
東場第四局。
私の親でドラは…ああいや、もう何も関係なかった。
〔一〕〔五〕〔九〕〔①〕〔②〕〔③〕〔１〕〔東〕〔東〕〔東〕〔南〕〔北〕〔白〕〔中〕
「…あの？」
「九種九牌…終わりですね」
彼女の眼を見ず、そのまま立ち上がって礼をした。
というかこのまま半荘まで行っても良いんだけどそれだと間違いなく南一局で元気少女が飛んで終わる未来しか見えない。
「…半荘か東風か決めてなかった筈です。まだ…」
「……別に良いけど、和さん一人でどうするつもりなんですか？」
「…え？」
「そこの元気少女は東場…いえ、後半になると段々ペースが落ちていく子でしょう？」

「あたりだじぇ!?一体どうしてわかったじょ？」
「聴牌速度が遅かったからですよ。一局目は聴牌、二局目一向聴、三局目では…三向聴くらいでしょうか？」
　私が考えながら言えば、元気少女は当たりだじぇ…としなしなと座った。
「…まだ咲さんが…」
「家のお姉ちゃん。±０大好きなんですよ、それにもう靴下履いてるし」
「……それと何の関係があるんですか？」
「点数見てます？」
「…っ！」
　和が思わず点数を見てから、彼女はこちらを見つめ返す。
　…本当にこんなことが出来るのか、それとも…自分の勘を信じて偶然だと言い張るのか。
「……」
「学生議会長さん。そろそろ雨が降りそうなので私は帰ります」
「あ、わ…私も帰ります！えっと和ちゃんごめ…」
「お姉ちゃん。死人に鞭打ちは駄目ですよ」
　私は咲の口を抑えて、そのまま出ていく。
　私が出て行った後の麻雀部は、やけに静かだった。

第四局

家に戻って来てから、私は自分の部屋で一人になった。
少しだけ考えを纏めつつも、それでも今日起きた出来事を思い出してしまう。
「…照お姉ちゃんが麻雀かぁ…」
毎日泣きながら私達に勝負を挑んできたあの照が麻雀をやっていた。
…それが少しだけ面白くて、私はつい微笑んでしまった。
それと同時に、携帯から音が鳴り出す。
照と咲は何故か携帯を持ってないから二人の可能性は放棄するが…それだとお母さんぐらいしか掛かってこない事になる。
「…って、本当にそうなんだ。もしもし？」
『……ねぇ。お母さん、本当にこれ電話出来て…』
『出来てるって言ってるでしょ？というか…ああもう。もしもし陰？』
「もしもし？どうしたの突然？」
急にお母さんが連絡する事はないし、私からすれば向こうで照の声が聞こえるのが不思議でしょうがないのだけど。
その問いに答えようとしたのか、お母さんの溜め息が聞こえた後に…
『照がね？陰に連絡を入れたいから携帯が欲しいって言って…』
「私に？一体どうして？」
『それは本人に聞いてほしいんだけど…という訳で照、変わるわよ？』
『ま、待って！まだ心の準備が出来てない…！』
「…何か忙しそうだし、また今度で…」
『それも待って！い、今！今出るから！』
そう言いながら何かを準備するようにドタドタと向こうの方で足音が聞こえる。
私達は溜め息を吐きながら、照が来るのを待っていた。
『…えっと、久しぶりだね。陰』

「そうだね。咲お姉ちゃんと会わなかった日以来かな？」
『あれは違くて…えっと…その…』
「……」
『兎も角あれは違くて、別に会いたくなかった訳じゃ…』
「その言葉を言うのは私に対してじゃなくて、咲お姉ちゃんに対してですよね？照さん」
『…うん。ごめんなさい』
「それで？今日はどのようなご用件で？」
しょんぼりとした声を聴きながらも、私はゆっくりと照に対して質問をする。
『…お姉ちゃん、約束を果たす為に頑張ってるよ』
「え？」
約束…何かありましたっけ？
記憶をフル回転させながらも、私はその事がバレない様にする為に相槌をする。
「…あ、ああ。そうですよね、はい。順調ですか？」
『うん。頑張って世界一位になる為に練習してるよ。その為に白糸台にも入ったし』
「白糸台…ああ、強豪校でしたっけ？」
『うん。陰はどうなの？やっぱり長野だと風越？それとも龍門渕？』
「…？清澄だけど」
『……』
「……」
『えっ!?高校になったら麻雀するって約束したよね!?』
「…したっけ？」
思わず声が漏れてしまい、私はしまったという表情をする。
勿論照がそれに気付かない筈もなく、私の携帯の方から意地悪な声が聞こえてきた。
『…へぇ。約束覚えてないんだ？じゃああの約束も覚えてないんだ？』
「…ど、どんな約束でしょう？」

『世界一位になったらお嫁さんになる。私に一度でも勝てたらお姉ちゃん達が満足するまでご奉仕するって』
「……っ?!ご奉仕?!」
昔の自分そんな事言ってたっけ？
そう思いながらも子供の頃を思い返せば…ああ、確かに言った気がする。
「…ご奉仕狙いだったの？」
『そんな訳ない。一緒に家族になる為にお嫁さんも狙ってる』
「……」
『清澄に麻雀部ってあるの？無いなら陰だけでも引っ越して…』
「…咲は？」
『…まだ、勇気が出ないから。今でも±0を崩す自信が…ない』
照がそう言うのと同時に、照の後ろから溜め息が聞こえる。
『…何、お母さん』
『照がそんな事で悩んでたんだなぁ…って。あんまり家族の事知らなかったって、そう思っただけよ』
「…」
『陰。そっちの寂しがりなお姉ちゃんは任せたわよ。私はこっちのお姉ちゃんを何とかするから』
「…分かりました」
『…お母さんって呼んでくれないの？』
「私にとってお母さんはどちらでも無いですから」
そう言って私は電話を切って、そしてベッドに寝転がる。
明日咲に麻雀をやるのか話をしようと、そう思いながら目を瞑った。

第五局

「…それで、何で私は此処にいるんです？学生議会長さん」
　朝、私は昨日出会った彼女達に出会わない様に祈りながら登校し、全員に捕まらず良かったと思った束の間。
　結局お昼に学生議会長に職権乱用され、食堂に集まる事になった。
「いやぁ。私達の部活見たでしょう？」
「そりゃあ麻雀打つ以上見ましたけど、それがどうかしました？」
「人数も集まり悪いし、結局大会にも行けそうになくてね？」
「ええそうでしょうね。麻雀が上手い人は風越に行くと聞きましたし、龍門渕？でしたっけ。其処もあると聞きました」
　私がそういうと、目の前の学生議会長が口を閉じる。
　そして代わりに隣にいた…眼鏡が私に対して質問をしてきた。
「其処まで解っていながらどうしてこの学校に来たんじゃ？あの腕なら引く手あまた…いや、有名になる事もあっただろうに」
「…？前提が間違っていますよ眼鏡さん」
「め、めが？」
「私は別に麻雀をやりに高校に入った訳じゃないんです。唯高校ってどういう所だろうって思って偶々此処に来ただけですから」
　私がそういうと、今度は彼女達が首を傾げた。
「…別に、私は中卒で出て行って、賭け麻雀で食べていくのでも良かったんですよ。唯、あのお人好し達がせめてと言ってきましたから」
「……確かに、貴女の運は超人的よ？だけど、それを裏で生きていくのとどう関係が…」
「私の昔のお父さんは裏プロでしたから。腕には少々自信があって…と、すみません。ちょっと失礼しますね」
「ちょっと、まだ話は…」
　私は立ち上がって、咲の元へ歩いていく。
「…何してるんです？」
「あ、えっと…えへへ。一緒に本を読もうかと思って…いいでしょ？」
「別に良いですが…そろそろお昼休み終わりますよ？」

「…そういえば最近午後の授業サボってるって聞いたけど…」
…それと同時に咲に捕まれ、私はズルズルと教室へ連れていかれた。
☆☆　☆ミ
さて帰ろうと鞄を持ち、校門から出て行こうとすれば…私は肩を掴まれ、ゆっくりと学校へ引き戻された。
思わず顔を見れば、其処には怒り顔でこちらを見つめる…ピンク髪の少女の姿。
「…えっと、誰です？申し訳ないですが告白とかはお断りして…」
「っ！昨日散々戦ったのに覚えてないんですか!?」
「…も、勿論覚えてますよ！当たり前じゃないですか…」
「じゃあ、私が昨日食べていたのはなんでしたか？」
その言葉を言われて私は考え…そして一つの結論を出す。
「勿論タコスですよね？」
「それは優希の方です！やっぱり覚えてなかったじゃないですか！」
「えっ、だって他の人食べてなかったじゃないですか！横暴です!?」
そのまま私は咲が本を読んでいた所へ連れていかれ、そのまま彼女は私を離してから私に対して吼える。
「…っ！私は悔しい！あんなに飄々としてて！しかも運もあるのに！本人はそれを気にもしない!!しかも午後の授業を休む不良でもあって！」
「…いや、それは…うん」
「そんな人間に！私の望んでいた才能が全部あって！……本当なら…になりたいのに…名前すら憶えてもらえない程…私は……」
最初は怒って…そして段々泣いている彼女には悪いが…そろそろ脚が痛くなったから座る。
「…私は人間として失格でしたから。…別に、覚えなくてよかったんですよ」
「何を…」
「少しだけ昔話をしますね？」
「…」

「私は宮永家の一人ではありません。それどころか、私は本来生まれてはいけない人でした」
　私がそういうと、彼女はそんな事無いと言わんばかりに首を振る。
「私は自我が芽生えてすぐに、麻雀に触れました。役も何も分からないまま対戦する事になり、相手は闇プロの父親、当然引き分け程度で終わりました」
「…え？」
「そして今度は役等を覚えて賭け麻雀。色んな事を覚えて帰ってきましたが…そうですね。試合には勝ちました」
　今考えればわかる。
　彼らだって歴戦の裏プロだった筈なのに、三歳の頃の私に負けた彼らはきっと…
「勝てたなら、良かったじゃないですか」
「全然よくないですよ。その時の点数は合計で１００点差。危うく殺されそうになったんですから」
「……」
「そしてその後私の父親が殺され、私が５００億程持って露頭に迷っている時に、照という少女に出会いました」
「…？」
　私はその時を思い出す。
　…ああ、とても可愛くて…幸せそうな表情だったな。
「妹と麻雀が出来る事が嬉しいと言っていました。そして私は彼女に連れていかれ…何故か麻雀をする事になりました」
「本当に謎ですね」
「えぇ。結果は当然私の勝ち。〝アリアリ〟だったら負ける筈も無いんですから、当然です」
「ありあり？じゃあ今度は喰いタン等を無しにすれば…」
　そしてその後、後ろで見ていた両親にイカサマがバレ、普通に戦って勝ちました。
　…まぁ、其処は言わなくても良いでしょう。
「後は諸々有って、私が麻雀で１００を超える死体を生み出した頃に

協定が生まれ、私は宮永の一員になったと…どうでしたか？」
「…そんな事信じられると思いますか？」
「まぁ思いませんね。だから話したんですよ…」
「…？」
「信じない人に言えば、私の血にまみれた人生も…唯の薄い本（ライトノベル）でしかないのですから」
そう言って私は手を振って立ち去ろうとし…足が痺れて倒れこむ。
…そしてそのまま連行され、痺れが取れる頃には部室へ連れこまれていた。

第五局一本場

「……待ち人来る！」
「というより連れられて来たんですけどね…それより私はどうして咲が此処にいるか聞きたいんですけど？」
「えっと…それは…」
「咲の意思で来たのなら兎も角、私の様に無理矢理連れて来たのなら…私は話も聞かずに帰りますが」
「まって陰！」
　私の一言に対して叫んで止めたのは、咲だった。
「…確かに私は、無理矢理連れてこられたよ。本を無理矢理借りた生徒会長の手によって」
「ちょ？咲？此処は私を弁護してくれる所じゃ…」
「…だけど、私は……ねぇ、陰」
　咲が何かを言いかけ、私の方をじっと見つめる。
「…私が麻雀するのは、可笑しいかな？」
「いえ。全然可笑しく無いですよ。寧ろ…そうですね」
　私が咲に対して、とある雑誌を出す。
　それは、私達の姉である照が不思議な笑みを浮かべながら写真を撮られていた。
「家で勝てなかった照が高校王者となってる方が一番可笑しいです」
「…っ！」
「咲、もし麻雀をするなら±０なんてやってられませんよ？貴女が例え＋５０００点で終わらせても、照は雑魚を狩って＋５６くらい上げてきます」
「…なら、私は…」
「えぇ。雑魚を全て薙ぎ倒す為に」
　靴下を脱いで大会に挑めばいい…そう言おうとしたが。
「陰を飛ばせるまで実力を付ければ良いんだね！」
　私のお姉ちゃんはどうやら狂戦士らしい。
　そんな事を思いながらも、直ぐに雀卓に座った咲を見て…偶にはそ

れも良いかなと思った。
☆〔一〕☆〔九〕☆
「陰以外の二人にルールを説明するね？これからするのは私達の家庭(ハウス)ルール。
半荘で私達の持ち点数は１００００００点、陰は１０００点で二翻縛り。これだけ」
「…何時も思うんですが、私の縛り緩くありませんかね？暗槓嶺上自模で終わりますよね？」
「……もう突っ込まないわよ。それで？私達はどうすれば良いの？」
少しワクワクとした表情で学生議会長が咲に対してルールを聞くのを見つつ、私は隣にいるピンク髪の少女に目を向け…苦笑した。
…凄い納得がいってない様な表情してる。
「…こんなの、私達の誰かが自模したらすぐ飛んでしまうじゃないですか」
「まぁ、それはやってからのお楽しみかな？…じゃあ、やろう？」
そう言って賽子を回す起家の咲を見つつ、私は微笑みながら雀卓を撫でる。
…今日は、負けれるかなと思いながら。
ドラは…〔1〕…ね。
〔一〕〔三〕〔三〕〔①〕〔②〕〔③〕〔①〕〔②〕〔③〕〔1〕〔1〕〔2〕〔3〕
私の手牌を見て、思わずため息が出る。
…これだったら三色純チャンドラ3で終わりかな？
〔一〕〔三〕〔三〕〔①〕〔②〕〔③〕〔①〕〔②〕〔③〕〔1〕〔1〕〔2〕〔3〕〔1〕
「立直」
「っ！早…運が良いですね」
「……」
学生議会長
咲〔東〕　ピンク髪
〔横三〕

〔一〕〔三〕〔①〕〔②〕〔③〕〔①〕〔②〕〔③〕〔1〕〔1〕〔1〕〔2〕〔3〕

両立直が出来たのは良いけど、相手から出る事は絶対無いだろう。

…というより、デジタル打ちである二人から出たら、私は迷わず彼女達と縁を切るだろう。

だからこそ自分の番で自模らなければいけない。

「…っ…お姉ちゃんだったらこの後ポンでもしてくれるのに…！」

「流石にそれを一般人にさせるのは無理じゃない？番飛ばしなんてしたことないでしょうし」

「…っ…一般人…」

「和、抑えて…流石に和まであっちに行ったら私が疲れるのよ…」

そんな話をしながらも、彼女達は安牌を捨てていく。

…こちらに字牌が来なかったのが、私の勝因でしょうかね。

「自模。両立直、一発自模、一盃口、純チャン三色ドラ3。合計で16000・8000」

「…はっ？そんな手を貴女最初から張ってたの？燕返ししたとかじゃなくて？」

「よくイカサマ知ってましたね。最近の学生はそういうの詳しいんですか？」

「…早く次に行きましょう」

私達の素っ頓狂な話題は、ピンク髪の少女によって終わらされた。

咲：84000

ピンク髪の少女：92000

学生議会長：92000

陰：33000

東二局、親は私でドラは…〔西〕。

…ドラ絡めを混一色するなら混一色か三暗刻かな？

そう思いながら開けた配牌だが…

〔五〕〔五〕〔赤五〕〔①〕〔③〕〔③〕〔⑦〕〔2〕〔3〕〔5〕〔6〕〔南〕〔西〕〔4〕

思ったよりも配牌が悪い。

…これだと〔西〕を捨てるかどうかで変わってくるんじゃないのだろうか？

〔南〕

〔五〕〔五〕〔赤五〕〔①〕〔③〕〔③〕〔⑦〕〔2〕〔3〕〔4〕〔5〕〔6〕

〔西〕

取り敢えずの〔南〕を捨て、私は一巡を祈るような気持ちで見て…

ピンク髪の少女の捨て牌を見て思わず破顔した。

四風連打をしないなんて、我が家では考えられないなぁ。

「……っ…」

「あー…これは…」

「…？」

〔南〕

〔五〕〔五〕〔赤五〕〔①〕〔③〕〔③〕〔⑦〕〔2〕〔3〕〔4〕〔5〕〔6〕

〔西〕〔4〕

〔南〕〔⑦〕

〔五〕〔五〕〔赤五〕〔①〕〔③〕〔③〕〔2〕〔3〕〔4〕〔4〕〔5〕〔6〕

〔西〕

…手牌が揃っているというのも考え物だね。

第二巡でこういう牌を切るというのは中々きつい。

そう思いながら自分の手番を待っていると…

「っ！ポン！」

学生議会長が咲の捨て牌をポンし、私の番を飛ばす。

…やるじゃん。

〔南〕〔白〕〔②〕

〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔横東〕〔東〕〔東〕

「…それもポン！」

〔南〕〔白〕〔②〕〔②〕

〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔横①〕〔①〕〔①〕〔横東〕

〔東〕〔東〕

学生議会長が2副露した時点で、もう聴牌している事は確定だろう。

…だけど、肝心の上がり牌が分からない。
いや、もしかしたらあり得るのだろうか？だけど…分からない。
〔五〕〔五〕〔赤五〕〔①〕〔③〕〔③〕〔2〕〔3〕〔4〕〔4〕〔5〕〔6〕
〔西〕〔③〕
…聴牌はした。だけど…何かが可笑しい気がする。
何が可笑しいと聞かれたら分からないが…だけど、少しだけ不思議な違和感がある。
「立直」
〔南〕〔⑦〕〔横西〕
〔五〕〔五〕〔赤五〕〔①〕〔③〕〔③〕〔2〕〔3〕〔4〕〔4〕〔5〕
〔6〕
〔①〕—〔②〕待ちだが…〔①〕は枯れているから実際は〔②〕の単騎待ちだ。
…本来ならドラの〔西〕待ちの方が良かったけど…何か嫌な予感がしたのだ。
そして…
〔五〕〔五〕〔赤五〕〔①〕〔③〕〔③〕〔③〕〔2〕〔3〕〔4〕〔4〕〔5〕
〔6〕〔②〕
「自模。立直自模ドラ1のみ。裏は…乗ってませんでしたね。２０００オールです」
「…うわぁ。その待ちなんだ…ドラの西捨てて…」
「…失礼ですが学生議会長さん。手牌見して貰って大丈夫ですか？」
「……はぁ。バレてたかぁ」
〔一〕〔二〕〔三〕〔②〕〔③〕〔西〕〔西〕〔横①〕〔①〕〔①〕〔横東〕
〔東〕〔東〕
倒した手牌を見て、私の勘が当たっていた事が分かる。
…あの人、地獄単騎待ちが好きな人なのか。
確かに〔④〕でロンする事が出来るけど…ポンした〔①〕は大丈夫と思ってしまう筈だ。
「東、ドラ2、チャンタですか。…危なかったですね」

「昨日は普通に打ってたからバレないと思ったんだけどなぁ…本当、隙が無いわね」

咲：８２０００

ピンク髪の少女：９００００

学生議会長：９００００

陰：３９０００

第五局二本場

ドラは…〔3〕か。
…結構中途半端だし、何かあるのかな？
〔四〕〔五〕〔五〕〔②〕〔②〕〔③〕〔⑥〕〔⑥〕〔⑦〕〔⑦〕〔6〕〔6〕
〔7〕〔7〕
ドラは無しで…咲を見たら何時の間にか靴下を外してるご様子。
…これドラは咲の方に乗りそうだね。
取り敢えず重ならない〔③〕を曲げて捨てておきつつ、私は捨て牌を見つめる。
「立直」
「っ！また…どうして…」
学生議会長
〔南〕
咲〔南〕〔南〕ピンク
〔横③〕
〔四〕〔五〕〔五〕〔②〕〔②〕〔⑥〕〔⑥〕〔⑦〕〔⑦〕〔6〕〔6〕〔7〕
〔7〕
ああ、字牌来なかった原因これだったのね。
四風連打されなくて助かったと思ったが、役牌つかなくてがっかりだったのか。
〔四〕〔五〕〔五〕〔②〕〔②〕〔⑥〕〔⑥〕〔⑦〕〔⑦〕〔6〕〔6〕〔7〕
〔7〕〔四〕
「自模。両立直、一発自模、断么九、七対子。８１００オールです」
「…なんというか。此処まで来ると偶然というよりは…」
「偶然です…絶対に偶然なんです…」
「……」
咲：７３９００
ピンク髪の少女：８１９００
学生議会長：８１９００
陰：６３３００

「…そういえば此処って、ダブル役満ってありなんですか？」
「あー…この点数だしありにしておく？大会では禁止だけど狙って出せる物じゃないし」
「そうですね。幾ら此処まで偶然が続いても、流石にダブル役満を出すなんて…」
　咲があちゃーという様な顔を見つつ、私はドラ表示牌を確認せずに配牌を確認する。
〔發〕〔發〕〔發〕〔2〕〔2〕〔3〕〔4〕〔4〕〔4〕〔6〕〔6〕〔8〕
〔8〕〔東〕
…緑一色…かぁ。
　確かに役満としては良いけど…ダブル役満を聞いたのに役満程度、
「恰好悪いですよね！」
「えっ!?陰…!?」
〔3〕
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔2〕〔2〕〔4〕〔4〕〔4〕〔6〕〔6〕〔8〕
〔8〕
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔2〕〔2〕〔4〕〔4〕〔4〕〔6〕〔6〕〔8〕
〔8〕〔南〕
〔3〕
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔南〕〔2〕〔4〕〔4〕〔4〕〔6〕〔6〕〔8〕
〔8〕
「…ポン」
〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔2〕〔横2〕〔2〕
　正直言って今学生議会長を放置するのは辛いが…私は取り敢えず思った事を言う。
「…対面で良かった…」
「っ…倍満当ててやるから覚悟しなさいよ…」
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔南〕〔2〕〔4〕〔4〕〔4〕〔6〕〔6〕〔8〕
〔8〕〔東〕
〔3〕

〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔南〕〔4〕〔4〕〔4〕〔6〕〔6〕〔8〕
〔8〕
「…チー」
〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔横2〕〔3〕
〔4〕
「…まさか全員狙っています？」
「私は親を終わらせて自分の親にしたいだけです」
「…ああ、そうなんですね」
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔南〕〔4〕〔4〕〔4〕〔6〕〔6〕〔8〕
〔8〕〔東〕
〔3〕〔4〕
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔南〕〔4〕〔4〕〔6〕〔6〕〔8〕
〔8〕
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔東〕〔南〕〔4〕〔4〕〔6〕〔6〕〔8〕
〔8〕〔南〕
〔3〕〔4〕〔4〕
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔南〕〔南〕〔4〕〔6〕〔6〕〔8〕
〔8〕〔西〕
〔3〕〔4〕〔4〕〔4〕
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔南〕〔南〕〔西〕〔6〕〔6〕〔8〕
〔8〕
「…ねぇ、陰」
「なんでしょう？」
「もう少しだけ手加減してくれない…？せめて一回くらいは親を流したいんだけど…」
「大丈夫ですよ咲」
「…まさか！てかげ…」
「咲に当てずに終わらせますから」
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔南〕〔南〕〔西〕〔6〕〔6〕〔8〕
〔8〕〔南〕
〔3〕〔4〕〔4〕〔4〕〔6〕

〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔東〕〔南〕〔南〕〔南〕〔西〕〔6〕〔8〕
〔8〕
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔東〕〔南〕〔南〕〔南〕〔西〕〔6〕〔8〕
〔8〕〔西〕
〔3〕〔4〕〔4〕〔4〕〔6〕〔6〕
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔東〕〔南〕〔南〕〔南〕〔西〕〔西〕〔8〕
〔8〕
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔東〕〔南〕〔南〕〔南〕〔西〕〔西〕〔8〕
〔8〕〔北〕
〔3〕〔4〕〔4〕〔4〕〔6〕〔6〕〔8〕
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔東〕〔南〕〔南〕〔南〕〔西〕〔西〕〔北〕
〔8〕
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔東〕〔南〕〔南〕〔南〕〔西〕〔西〕〔北〕
〔8〕〔西〕
〔3〕〔4〕〔4〕〔4〕〔6〕〔6〕〔8〕〔8〕
〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔東〕〔南〕〔南〕〔南〕〔西〕〔西〕〔西〕
〔北〕
さて役満聴牌はした訳だけど…

陰

〔3〕〔4〕〔4〕〔4〕〔6〕〔6〕〔8〕〔8〕

咲

〔東〕〔一〕〔赤五〕〔①〕〔八〕〔③〕〔③〕〔③〕〔⑦〕

学生議会長

〔南〕〔1〕〔7〕〔②〕〔③〕〔①〕〔二〕〔三〕〔三〕

ピンク髪

〔發〕〔①〕〔九〕〔⑨〕〔①〕〔一〕〔1〕〔⑦〕

〔北〕は残ってはいるけど…流石に誰かが拾ったら持ってるだろう。

…だからこそ…この勝負…〔北〕を引かなきゃ負ける！

「…流石に捨てられませんね」

ピンク髪の少女が私の方をじっと見て…そして震えながら他の牌を捨てた。

「…ああ、これは駄目だわ」
学生議会長が、私の方を見て苦笑いしながら手を崩す。
「……陰。今、どう？」
「凄く楽しいよ。…このまま上がれたら、私の勝ちだね」
「…そっか…うん。そうだね」
その言葉と同時に、咲が面白そうに微笑んだ。
「槓」
〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔④〕
〔④〕〔■〕
「もう一個槓」
〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔四〕〔四〕〔■〕〔■〕
〔④〕〔④〕〔■〕
「…もう一つ槓！」
〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔赤⑤〕〔⑤〕〔■〕〔■〕〔四〕〔四〕〔■〕
〔■〕〔④〕〔④〕〔■〕
「……最後の槓！」
〔■〕〔■〕〔■〕〔⑥〕〔⑥〕〔■〕〔■〕〔⑤〕〔⑤〕〔■〕〔■〕〔四〕
〔四〕〔■〕〔■〕〔④〕〔④〕〔■〕
…そのまま、私達は睨み合う。
数秒、数分…あるいは一瞬だろうか？
…互いに見つめ合い…そして、
「立直！」
〔東〕〔一〕〔赤五〕〔①〕〔八〕〔③〕〔③〕〔③〕〔⑦〕〔横中〕
「ポン！」
〔發〕〔①〕〔九〕〔⑨〕〔①〕〔一〕〔1〕〔⑦〕〔白〕
〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔中〕〔横中〕〔中〕〔横2〕
〔3〕〔4〕
「それポン！」
〔南〕〔1〕〔7〕〔②〕〔③〕〔①〕〔二〕〔三〕〔三〕〔7〕
〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔横白〕〔白〕〔白〕〔2〕
〔横2〕〔2〕

「そちらもポンです！」
〔發〕〔①〕〔九〕〔⑨〕〔①〕〔一〕〔1〕〔⑦〕〔5〕
〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔中〕〔横中〕〔中〕〔横2〕〔3〕〔4〕〔7〕
〔7〕〔横7〕
「それもポン！」
〔南〕〔1〕〔7〕〔②〕〔③〕〔①〕〔二〕〔三〕〔三〕〔9〕
〔■〕〔■〕〔■〕〔■〕〔横5〕〔5〕〔5〕〔横白〕〔白〕〔白〕〔2〕
〔横2〕〔2〕
「…じゃあそれもポンです！」
〔發〕〔①〕〔九〕〔⑨〕〔①〕〔一〕〔1〕〔⑦〕〔七〕
〔■〕〔9〕〔9〕〔横9〕〔中〕〔横中〕〔中〕〔横2〕〔3〕〔4〕〔7〕
〔7〕〔横7〕
「それをポン！」
「っ!?」
「嘘…生徒会長混一色じゃなかったんですか!?」
「倍満狙って役満積もられたらしょうがないでしょ！」
〔南〕〔1〕〔7〕〔②〕〔③〕〔①〕〔二〕〔三〕〔三〕〔六〕
〔■〕〔横七〕〔七〕〔七〕〔横5〕〔5〕〔5〕〔横白〕〔白〕〔白〕〔2〕
〔横2〕〔2〕
私以外の三人が、牌を一つにするという暴挙に出た。
…しかも、デジタル派の二人まで。
「…やっぱり、麻雀は楽しいよね」
「うん。やっぱり楽しいよね…でも…」
「はい。次は咲の手番でしかも立直済み。貴女が引いて自模って終わりです」
「……そうだね」
そう言いながら引いて…咲はその結果に少しだけ苦笑した。
「…じゃあ、行くよ」
打、〔北〕
「「ロン！」」
陰

〔發〕〔發〕〔發〕〔東〕〔東〕〔東〕〔南〕〔南〕〔南〕〔西〕〔西〕〔西〕
〔北〕
ピンク髪少女
〔北〕〔9〕〔9〕〔横9〕〔中〕〔横中〕〔中〕〔横2〕〔3〕〔4〕〔7〕
〔7〕〔横7〕
学生議会長
〔北〕〔横七〕〔七〕〔七〕〔横5〕〔5〕〔5〕〔横白〕〔白〕〔白〕〔2〕
〔横2〕〔2〕
「…これは…」
「分かってはいましたが…」
「…頭ハ…」
咲達が何かを言う前に、私は微笑みながら口にする。
「三家和で流局ですね」
「えっ…ちょ、流石に頭ハネでしょ？大会ルールだと…」
「大会ルール参照ならダブル役満は無しらしいですけど？」
「それは点数を考えて…」
「……とても楽しかったですし、私はこのまま流局でも…何ならこのまま終わっても良いんですけど」
私がそう言いながら席を立つと、ピンク髪の少女が私の方を見て…そして溜め息を吐いた。
そしてそのまま私の手を握って…何故か抱きしめた。
「…貴女は……分かりました。じゃあ一つだけ約束してくれませんか？」
「…なんでしょうか？」
「麻雀部に入部して下さい。私が貴女を倒す為に、入ってほしいんです」
「……」
そう言われたのは、一体何時ぶりだろうか？
確かにさっき倒すと言われたけど、それでも無理だと半ば諦めていた咲よりも…とても太い芯の通った言葉なんて久しぶりだ。
…だからこそ、私は見てみたい。

ピンク髪の少女…ううん、和の限界を。
「…分かりました和。私も入る事にしましょう」
「……今、名前…」
「ですがもし諦めるのなら、その時は貴女の限界だったということで其処で終わりにします」
「…分かりました。よろしくお願いしますね…陰さん」
そのまま離れた和を見て、私は微笑みながら咲を見る。
「…さて、咲？」
「な、何でしょうか…」
「さっきまで私はこの楽しい麻雀を終わらせたくないから三家和にしたのは分かりますよね？」
「…うん」
「しかし麻雀部に入った事でこれからこんな麻雀を毎日出来る筈です」
「…ま、毎日はつらいんじゃないかなぁ？だからほら、此処は三家和のまま…」
私達はそのまま微笑み合って…そして、咲が空を拝んだのと同時に
「小四喜、字一色、四暗刻単騎。四倍役満くらいですか？」
「……」
無慈悲な宣告をしました。
咲…—１１８１００

第六局

「あれ？今日は和とお姉ちゃんがいないんですね」
「そうねー。今日はまこのとこの手伝いに行ってもらってるのよ」
　そういいながら私と学生議員長が雀卓に座り、小さく笑い合う。
　そのままサシの勝負をしながら人を待つのも、また一興だなーなんて考えながら学生議員長を飛ばし、私は小さくため息を吐いた。
「いつになったら私は弱くなるんですかねー」
「私としてはこのまま貴女を先鋒にして全部飛ばしてもらうでも良いんだけどねー」
「あらあら。そんなことをしたら私は降りようとして振り込んでしまうかもしれないです」
　そういいながら苦笑すれば、言うと思ったという表情で私を見つめる。
「わかってるわよ。だから貴女に先に見せたの」
「私としては補欠でも良いんですが……そうじゃいけないんですよね？」
「えぇ。まこがお店が忙しくて部活に出れない……そういってたわ」
「そうですか……私が生まれていなきゃ5人で出来ていたかもしれないですね……きっと、もっと強かったと思いますよ」
「貴女が入るより強いの？」
「何万局も見ていた人間が、弱いと思いますか？」
　私がそういいながら首を傾げれば、彼女もそのとおりねと笑う。
　あの眼鏡さんも別に弱くはない。寧ろ強い部類だと思うのだが……何故あんな風に逃げているのだろう。
「…そうね。もし貴女がまこにアドバイスをしようとするなら、なんてする？」
「何故〝防御にしか〟使わないのか、ですかね。例えば私だったら3か6巡目くらいに自分の手牌と相手の捨て牌みて残りの牌計算しますよ…それに」
「それに？」

大会のルールを見ながら、私は小さく笑みを浮かべる。
「この大会、守れる人間を一人持っておくのが一番強いと思います」
「へぇ？うちだと？」
「学生議会長と私、そして眼鏡さんです」
「あら？和だって逃げれるんじゃないかしら？」
「今の和にそれは期待してないですよ。もしするなら……そうですね。完全にデジタル打ちが出来るくらいになったら、でしょうか」
そういいながら私は小さく息を吐く。
…もし私がこの中からやるんだったら……そうだなぁ。
「先鋒元気少女、次鋒咲、中堅和、副将学生議員長って所でしょうか」
「あら、理由を教えてくれる？」
「……まずですが、先鋒次鋒中堅の三人はどうでも良いんです。何処で全力で稼いでもらうかどうかって所ですから」
「どこで？」
「例えば元気少女、和、咲だったら先行逃げ切りに、さっきの形だったらバランス型に、そして咲、和元気少女だったら…」
「薄い所を一気に稼ぐ…といった感じかしら」
「そうです。そして私と学生議員長は中堅までの得点を整理しながらどうやって立ち回るかを決めます」
そう。私達は中堅までで終わらせるという野暮な事をさせない。
副将を咲にして±０で守りもというのも考えたが、どう考えてもしっくりこない。寧ろ警戒されるだろう。
「学生議員長の悪待ちは攻めに使えますし、そもそも守りだって一級です。というか、普通に強いです」
「あら、嬉しい事を言うわね」
「〝貴女がこの学校の麻雀部の部長だから〟ですよ。唯麻雀が好きだからって理由で三年間続けられる程軟じゃないのはわかりますから」
私が笑いながら呟くと、彼女は何回か口を開こうとして……そして、目線を逸らした。
「……どうするの。それで、実は唯好きってだけで弱かったら」

「何か目標がある貴女が、弱いわけないじゃないですか」
「……っ！わかったわよ！やるわよ副将！」
「えぇ。久部長にやってもらうのが一番安心できますから」
「……いつか、刺されるわよ…」
　何か呟きながら私の方を見て紙に名前を書いていく部長を見つつ、私は小さく笑みを浮かべる。
「それで！、もし私が失敗したら大将の貴女が責任取ってくれるのよね？」
「勿論。……ああそれと…」
「……？」
「ちょっと和、借りてもいいですか？」

「…君が、和の友達か？」
「はい。いつも娘さんにお世話になっています。本日は〝勉強会〟をしようと思っていまして」
「……そうか」
「娘さんは東京の進学校に進めるくらい賢いんですよね。私の姉もそうで、実はお姉さんから〝色々〟教えてもらってるんです」
「…そうか。ゆっくりしていくといい」
　という会話もあったものの、私達は金曜日と土日を使って麻雀を鍛える事となった。
「という事で勉強しましょうか」
「は、はい！」
「とりあえず実力を見たいのでサシ……いえ、ネトマでもしますか」
「わ、分かりました！」
　そういいながらパソコンの前に新しく椅子を用意し、ゆっくりと私を隣に座らせた。
　のどっちと書かれたアカウントと、いつも持っているのか自然に抱きしめていたペンギンの人形をを見ながら、私達は世間話を続ける。
「そういえばなんでオカルトがあり得ない――！とか言うんです？」

「…多分、父親の影響だと思います」
「お父さんの？」
「そうです。その…暗闇だとお化けとかいそうじゃないですか…」
「へー。和にもそんな可愛い時期があったんだねー」
「え!?そ、そんな?!」
何に対してのそんななのかはわからないが、私は話の続きを聞くべく耳を傾ける。
私が喋ることがないとわかったのかどこか頬を膨らませた和が、ゆっくりと話を再開した。
「それで、その時にお父さんが言ってくれたんです。そんなのはオカルト。あり得ないって」
「成程」
「だから麻雀もやめなさいって。麻雀は運の要素が強いって……」
「まぁ否定はしませんけ……のど」
名前を呼ぶことは、出来なかった。
それほどまでに鋭い視線が、捨てられた牌と手牌を五秒ほど見つめ……そして、
「……」
今までと同じ、けれどどこか違う打ち筋。
序盤だから？それとも洗牌されているから？小さく首を傾げながらも、私は小さく彼女の動きを見て……そして…
「……」
小さく、笑みを浮かべる。
…現実で打っていたとは違う、全てが正しい即断即決。判断であれば並みのプロは超えているし、速度だけなら私よりも速い。
…それが、どうしようもなく面白い。もっと、もっと見たくなった。
「……ふぅ。…？陰さん？」
「和」
「は、はい！」
「和の事、もっと好きになった」
「へ!?ちょちょ、何を言って……」

だから、と小さく呟いてから……私はゆっくりと笑みを浮かべた。
「もっと強くなる方法、知りたくない？」
―「和達にね？私の知り合いのプロをぶつけたの」
―「もし私の予想が正しければ、あの子は壁にぶつかってショックを受けると思う。そして、それを直す為の合宿だったんだけど……」
―「良いわよ。和は貴女に任せるわ。代わりに……私の予想以上の強さに仕立て上げなさいよ？」
「…強くなる、方法ですか？確かに現実の方だとミスが多いですが……」
「そうじゃありません」
「……？」
「もし、もし和がお父さんじゃなくて、オカルト（私）を信じてくれるなら……和は、もっと強くなれます」
「…陰さんを…」
「そう。だから、聞かせて下さい……もし、勝たなければいけない理由があって、麻雀に挑んでるのなら……」
―オカルト（宮永陰）を信じて。

インターバル

…目が覚めるのと同時に、隣から少女の寝息が聞こえる。
目を閉じたまま、腕をこっそりと伸ばせば……私の手は、眠ったままの少女の唇に触れた。
「ん…みゅ……のど…か？」
眠そうな陰の声を聴きながら、私は寝たふりを続ける。
…陰を信じる。その言葉がずっと心の中でふわふわ残っていた。
「…ねてう…です…か？……もぅ…」
私の身体に、じっとりと暖かい熱が伝わる。
…休み時間の時、咲さんが陰を起こす時凄い苦労すると言っていたのはこういう事だったんだなぁ…なんて苦笑しながら、片目だけゆっくりと開けて確認する。
「…みゅ……す…ぅ……」
幸せそうな顔をしながら、陰が私を抱きしめて眠っていた。
時々嬉しそうな顔で「のどか…しゃき…」と言っているのを見て、顔がにやけてしまうのを感じる。
「……本当に、今が幸せなんですね…」
前に聞いた過去を思い出しながら、私は陰の頭を優しく撫でる。
…正直、今でも信じる事は出来ていない。でも……
「……調べたら出ちゃったんですよね」
ダークウェブでしか現れない幻のサイト。
裏の高レート賭け麻雀の記録。其処には陰という名前がしっかりと載っていた。
最後に書かれていたＶＳｓｕｋｏｙａ……あれは、本物なのだろうか？
「……いえ、違うでしょう。まさかあの小鍛治プロが裏に……なんて、週刊誌に載ってしまったら謝罪案件でしょうから」
小さく呟きながら、私は陰を起こさない様にゆっくりと手を外す。
そしてもはや習慣となったエトペンを抱こうとして……
「……あれ？エトペンは、何処に……確か昨日はちゃんと抱きながら

麻雀をして、その後……」
…小さく首を横に動かすと、エトペンはパソコン横の椅子に座らせられていた。
……私が置いたのだろうか？上手く思い出せないが、何かそんな気がする。
「…エトペンがないと寝れなかったのに…どうし……ふふ」
小さく呟くのと同時に、笑みが零れる。どうして…だなんて、理由は一つしかないだろう。
私のベッドで未だ幸せそうに眠ってる少女がいるから、私はエトペンを抱きしめなくても幸せに眠れたのだ。
そのままもう一度ベッドに座り込み、眠りこけている陰を抱きしめ…
「……誰にも、渡したくありませんね」
小さく、呟く。…彼女は〝鳥〟だ。
掴もうと思っても手からするりと抜けてしまうし、追いかけようと走っても彼女はどんどん飛んでいく。
地面を駆け抜け、海を通り過ぎ、山と並行し……何れ空へと昇っていく。
…だけど、そんな鳥でも眠りはする。
立ち止まり、水を飲んで時々景色を楽しんで……そして思い出を抱いて眠る。
—だからこそ、思うのだ。今なら飛ぶ前に、捕まえられるのでは…？
顔と思考が、陰の方へ引っ張られる。
…手を伸ばせば触れられる距離。もし、抑えつけてしまえば起きてすぐの陰は抵抗出来ないだろう。
……そうすれば…
「…っ!?」
そんなことを考えていた時、ごとりと何かが落ちる音がした。
…顔を音のなった方に向ければ、一つの絵本が落ちていた。
見慣れた表紙に思わず駆け寄って、その本の優しく撫でてから、本

を開く。
「…エトピリカになりたかったペンギン…」

〝どうしてあの子のクチバシは綺麗なんだろう?どうしてあの子は飛べるのに、僕は飛べないんだろう?〟
そんな疑問から、物語は始まる。
エトピリカは優雅に飛べるから、何処にでも行ける。
とても綺麗なクチバシを持っているから、常に皆に囲まれている。
僕もあんな風になれれば……そんな風に思ったペンギンは飛ぶ練習をしたり、クチバシを磨いてみたりして。
―同じになれば、きっとあの子とも仲良くなれる筈だから。

だけど、結局ペンギンはペンギンのままだった。
誰にも相手されず、〝跳ぶ〟事は出来ても〝飛ぶ〟事は出来ない。
…そしてそんな時、眠っているエトピリカを見つけた。
〝この羽を取って付けられたら、僕も飛べるのだろうか?このクチバシを交換出来たら、僕も人気者になれるのだろうか?〟
歪んだ考えに気付く事もなく、ペンギンはエトピリカに向かって歩いていく。
…そして、エトピリカの傍に辿り着いてからペンギンが羽に手を伸ばしかけた時…
〝あ、あなたがペンギンさん?わたし、いちどはなしてみたかったの〟
〝どうやったらあなたみたいに、じめんをすいすいすべれるのかしら?どうやったら、あなたみたいに、おさかなをつかめるのかしら?〟
〝…どうして、そんなことを僕に聞くんだい?君には何処へにでも飛んでいける羽や、皆を魅了するクチバシがあるじゃないか〟
〝きれいなだけのくちばしがあっても、あなたとはなかよくなれなかった。そらをとべるはねがあっても、じめんをすべることはできな

かった〃
その言葉を聞いて、ペンギンは自分が最初に求めていた〃仲良くなりたい〃という気持ちを思い出す。
…そして二人は得意な事を出し合った。その中の共通点を探す。
そして最後は海に二人で入って泳ぎながら、会話をして終わるのだ。
〃いつか、わたしもじめんをすべれるようになる！あなたといっしょにできること、ふやしたいから！〃
〃僕も空を飛べるように頑張る！君と一緒に飛べるように、頑張るから…〃

「……今の私は、ペンギンそっくりですね」
小さく呟きながら、私は苦笑した。
…本を仕舞い、陰の事を起こそうとし……
「……陰さん、見てましたね？」
「ふふ。和が好きって言ってたエトピリカになりたかったペンギンの話、気になってたんです。
和の声で聴けて、幸せです」
「…もう」
ベッドで枕を抱えて微笑んでた陰を見て、私は怒った振りをしながら立ち上がる。
…顔を背けながら、照れた顔を見せない様に……そして早く収まるように。
「…全く……早く着替えて出掛けますよ。今日は近くの雀荘に行くんですよね？」
「はい。…あ、服貸してもらえます？」
「へ？良いですけど、なんで…」
だけどその顔の赤みは…
「服持ってきてないのと、和の服を着てみたいってのが理由です」
「…っ……胸は合わないですからね！」
もう暫く、引かせて貰えないらしい。